

感動をありがとう!

「地域カフォーラム in あきた」 We create our future

- なまはげ・こまちを超えて -

2013
7/28
(日)

明日の秋田に光りを灯す
若者8名からの熱いメッセージ

「秋田の未来は
こう切り開く!」

コーディネーター
蒔田 明史さん
(秋田県立大学)

小玉由紀さん(男鹿市)
4人のお子さんを育てながら
男鹿市で地域おこしに奮闘中



武内伸文さん(秋田市)
「SiNG」代表として豊かな
社会づくりを目指し活躍中

細谷拓真さん(横手市)
「Yokotter」代表として
横手市を中心に各方面で活躍中



原田裕成さん(秋田市)
秋田県のモデル事務所を
立ち上げ活躍中



学生代表
齋藤千尋さん(秋田市)
「秋田県立大学学生復興支援団体 up-A」
立ち上げメンバー



CO2
起業し奮闘中の若者
東海林拓郎さん(秋田市)
「あきた地域環境会議」を立ち上げ
理事、事業総括として奮闘中

CO2

若手農業者
中村光心さん(鹿角市)
「北限の桃」を栽培
秋田県農業近代化ゼミナール副会長



起業を考えている若者
須崎裕さん(秋田市)
国際教養大学生
外国人を対象に観光業を企画中



基調講演



馬路村農業協同組合 **東谷望史** 代表理事組合長
講演テーマ「小さな村の大きな挑戦」

1954年 高知県生まれ。特産品(ゆず加工品)と共に村をまるごとブランド化に導いたカリスマとして、2005年に「観光カリスマ」、2007年に「地域活性化伝導師」に。

総括講演

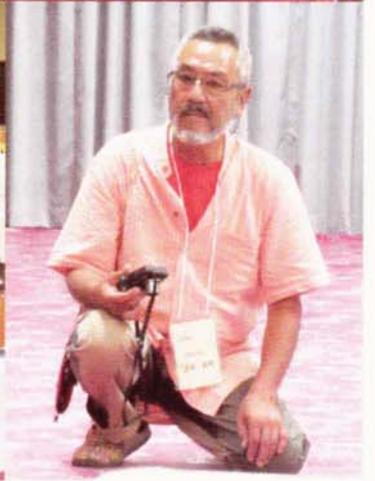


内山節 先生(哲学者、立教大学大学院教授)
講演テーマ「新しい共同体の思想」

1950年 東京都生まれ。1970年代から東京と群馬県上野村を往復して暮らしながら、存在論、労働論、自然哲学、時間論において独自の思考を展開する哲学者。NPO法人「森づくりフォーラム」代表理事。

「地域カフォーラム in あきた」 報告書

「地域カフォーラム in あきた」 実行委員会



目 次

1. 巻 頭 言	内山 節 (立教大学大学院教授) 菅原 歆一 (フォーラム代表) 関 徹彌 (フォーラム実行委員長) ……………	3
2. 基 調 講 演	東谷 望史氏 馬路村農業協同組合 代表理事組合長 ……………	5
3. プレゼンテーション「明日の秋田はこう切り開く！」	……………	6
	コーディネーター 蒔田 明史 プレゼンター 細谷 拓真 小玉 由紀 中村 光心 東海林拓郎 原田 裕成 須崎 裕 齋藤 千尋 武内 伸文	
4. 総 括 講 演	内山 節氏 (哲学者、立教大学大学院教授) ……………	15
5. アンケート結果	……………	16
6. 広 報	……………	17
7. 開 催 要 項	……………	19
8. 時 系 列 記 録	……………	20
9. 実行委員名簿、協賛者一覧	……………	21
10. 実行委員からの「一言」	……………	22
11. 交流会の記録	……………	24

1. 巻頭言

あの日出会った、秋田の若者たちへ

立教大学大学院教授 内 山 節



最近ではいろいろなところで、新しい世代の人たちが台頭してきていると感じている。すべてを経済発展で解決していこうというような高度成長型の発想をしない人たちが、各地で活躍はじめているのである。

その人たちの方向性もひとつの方向に定まりかけている。コミュニティをつくろう、コミュニティとともに生きようという方向性である。とともにコミュニティと、ともに生きる経済を結んでいこうとするのも今日の傾向である。だからコミュニティビジネスを起こしたり、ソーシャルビジネスを試みたりしながら、ともに生き、ともに分かち合う経済をつくろうとしてさまざまな試みが行われている。

そのコミュニティのなかに自然を取り込み、農村との関係を取り込んでいこうとするのも今日の方向性である。都市と農山村を結んで一体的な世界をつくろうとしている。その担い手にはさまざまな経歴の人たちがいて、その地域で生まれた人も、よそから移ってきた人もいる。農民もいれば街で自営的な仕事をしている人も、役所や企業に勤めている人もいる。最近では外資系企業を辞めてそういう活動をする人もよく目につく。もちろん主婦も、そういう活動を応援している「古い」世代の人もいる。

シンポジウムで出会った秋田の若者たちも、そんな人々だった。おそらく参加者のほとんどが、彼らに秋田の未来を託したいと思ったことだろう。現代社会の矛盾を克服した新しい社会をつくるには、新しい発想とその発想を現実化する行動力のある人たちが、社会づくりの軸になる必要があるからである。

もちろんまだそういう人たちは少数だろう。しかしその活動をみんなが見ている。そしてあるとき、みんなが動き出すはずだ。そのことを信じてともに歩いて行こう。

若ものたちに未来を託したい

フォーラム代表：『かがり火』発行人 菅原 歆一



50年後の日本はどうなっているのだろうか。赤字国債は増え続けて国家は破たんし国民は困窮にあえいでいるだろうか。それとも経済は奇跡の回復を遂げて所得は倍増し世界に冠たる地位を築いているだろうか。人口はますます減少して市町村には人影も見えなくなり、限界集落は消滅集落となっているだろうか。それとも一極集中は解消され、Iターンが盛んになり、元気なまちやむらが増えているだろうか。50年後の日本は誰にも分からない。

それでは50年前の1960年代の日本はどうだったのだろうか。まだ過疎化・少子化という言葉はなかった。企業の海外流出も非正規雇用も派遣切りもなかった。明日は希望にあふれていて、ゴールデンウィークや夏休みは映画館や百貨店、行楽地は人で賑わった。原発が事故を起こすなんて誰も考えていなかった。50年という歳月はどんなに優れた政治家でも偉い学者でも予測することは難しい。それでは私たちはいま何をしなければならないのだろうか。

成熟した国家が国民の意思を統一するために国威を発揚することではなく、グローバル化の中であくなき経済成長を目指すことでもない。まして二度目のオリンピック開催決定に浮かれることでもない。たとえ政治や経済にどんな狂瀾怒涛が押し寄せようともかけがえのない自然と人間の暮らしを守るための英知を見失わないことだ。英知は為政者や学者の頭の中にあるのではない。真面目で誠実で、人々の暮らしに愛あふれる視線を注ぐ無名の人たちの中にある。

今回のフォーラムは、しなやかな若ものたちの感性に触れることができた。年配のスタッフは前面に出ず、若ものを応援する側に回った。50年後の日本に希望を持てるフォーラムだったと思う。

巻頭言に替えて（～フォーラム締めくくりの挨拶より～）

フォーラム実行委員長 関 徹 彌



皆様、今日のこのフォーラム、いかがだったでしょうか。私は、8人の若い方々の話を聞き、感動で胸が熱くなりました。8人みんなが秋田を愛している。秋田の未来を創ろうとしている。そしてそのための努力をしている。その姿に感動しました。

秋田は今活気を失いつつあります。出生率は18年連続で全国ワースト。2040年には県人口が70万人を割り込むという推計も出されています。基幹産業である農業や林業などが衰退し、若い人の勤める場所がどんどん失われているのですから、人口の減少はやむを得ないことでしょう。

しかし、人口が減るからといって未来がないということではありません。こういう現実の中にあって、未来を創ろう、夢を叶えようと頑張っている若い方々は県内には大勢います。今日はその一端を見た思いがします。8人のプレゼンターの皆さん、本当にありがとうございました。

また、高知県からこのフォーラムのためにわざわざお越しいただいた馬路村農協の東谷組合長の、人口970人の過疎の村にあってユズを素材にして年商30億円の売上げを上げているという話。また、超過密なスケジュールを縫ってお越しいただいた内山先生の上野村を中心とした共同体作りの話にも感動致しました。本当にありがとうございました。

秋田をどうにかしようと実行委員会を立ち上げたのは1月。当初の5名の実行委員は今では41名になり、10回の会議を開いて備えてきました。行政や大口スポンサーに頼ることなく、市井の民間人だけで少ない予算でどうにか開会にこぎつけました。

秋田には未来を創ろうと努力している若い方々がまだまだ大勢います。私たちはこれからもそういう若い方々に熱い思いを発表する場を提供して行きたい。そして発表者同士が連帯し合ってゆくならば、それは大きな力となって秋田の活性化につながるのではないかと思います。本日は本当にありがとうございました。

2. 基調講演

小さな農協の大きな挑戦

馬路村農業協同組合 東 谷 望 史 代表理事



ただいまご紹介いただきました馬路村農協の東谷です。

馬路村は徳島県に隣接し人口970人、面積の96%が森林という過疎の村です。

私は農協に入ったころ、当時の時代を平凡で退屈な時代だと思っていた。ところがある日坂本龍馬が夢に出てきて「何を言っているか。今の時代にもやることはちゃんとある」と言った。ほんの一瞬でしたが、その言葉が強烈に頭に残りまして、今与えられたことを一生懸命やるのが役目なのかなと思うようになりました。

26歳のとき組合長に営農と販売の両方の仕事をやらせてほしいと申し出た。組合長からは「やるならば一生やれよ」と言われたんですね。3年や5年でポジションが替わるという軽い気持ちで受けていたら一つの物を作り継続させてゆくという形にはならなかったと思う。組合員は600人、山間地で農地が少ない、農協としてどうしようかと悩みましたね。

当時農家はユズを細々と栽培していた。竹棒で実を落とし、家に持ち帰って加工していた。ユズは鋭く長いとげがあり、高さは4尺にもなる。収穫労働が大変です。しかも馬路村のユズは形が悪く青果としては売れない。加工しなければ売り物にならない。ならば加工しようと40年ほど前から農協が本気で加工するようになりました。当初は県内で売っていたが、飽和状態になって売れなくなった。ならばと東京や大阪に売りに行った。経費はかかったが、それが通販など色々なチャンスに結びついた。大阪に行ったとき、どの会社でも夜遅くまで電気がついていて驚いた。馬路村では営林署も農協も5時で終わる。もっと努力しなければ、24時間闘わなければ、と思うようになった。

モノが作れて売れてゆけば田舎の方がチャンスがあります。今では売上げは33億円になりましたが、1億円になるまでに10年かかった。20億円までは一気に行った。50億円まで行くのではと思ったが30億円でもたついている。人作り、売り方が大事だなと思っています。

設備には金を掛けています。設備が整っていない頃、私はエレベーターのワイヤーが切れて転落し、額を280針縫う事故に遭い命拾いました

ことがある。安全でなければと思うようになりました。

ユズ酢を売るために全国を走り回ってわかったことは、都会では高知ほど酢を使わないということ。ならばそのまま飲める酢を作ろうと考えた。当時海外産のレモン果汁は売れていた。国内産の柑橘類では大分の「つぶらなカボス」が大ヒットしたことがあります。カボスにはかなわないが「ゴクン馬路村」は2番手くらいにつけています。うちの製品の特色は絞りたいユズを使っていることと有機栽培で化学系肥料を使っていないこと。これが最大の強みです。

ユズの加工品は果汁が主ですから絞ると皮が残る。その皮を活用できないかと考え、苦みを取るのに試行錯誤したが佃煮にした。種は1果に30個くらいあり10トン以上出る。それで油が絞れないかと大手メーカーに打診したが天ぷら油にしかならないと言われ油はあきらめたが、なにかできるはずとアルコールや焼酎に漬けて抽出し今では化粧水にしています。

ヒット製品の「ゴクン馬路村」は、当初100円ドリンクとして売れるはずがないと思った。だけどやってみようと手作りで始めたものです。それが少しずつ売れて今では人気商品となった。

そのころ工場の拡張を提案したが通らない。ならばと4億5000万円もかかる計画図(案)を描いてみた。それが条件付ですんなり通って今の工場ができた。山も買った。農協としては買えないので別会社を作って買ってユズ畑にしている。

私はこの事業に27歳から取り組んできた。まさかユズでここまでこれるとは思っていなかった。今では95人の職員がいる。地域を作るということは売上げがどうのということではない。ずっと続いてゆくもの。次の世代にどうつなげてゆくかということだと思います。人口千人足らずの小さな村でもここまでできたということを知っておいていただきたいと思います。

(文責：関)

3. プレゼンテーション

「秋田の未来はこう切り開く！」

明日の秋田に光を灯す若者8名からの熱いメッセージ

コーディネーター 蒔田 明史

プレゼンター 細谷 拓真 小玉 由紀 中村 光心
東海林拓郎 原田 裕成 須崎 裕
齋藤 千尋 武内 伸文

プロローグ

秋田の未来は本当に暗いのか？

秋田県立大学教授 蒔田 明 史



出生率、婚姻率、がん死亡率、自殺率…秋田県には全国ワーストがたくさんある。少子高齢化、耕作放棄や限界集落の増加…だから「秋田の未来は暗い！」ような気になる。でも本当にそうなのだろうか。それを考えてもらうのが本フォーラムのテーマである。

私たち実行委員会では、タイトルについてかなり議論した。“We create our future!”という副題に注目してほしい。“Let’s create”ではなく、“We create”としたところに私たちの意図がある。「未来を作ろう！」という呼びかけではなく、「私たちが作るんだ！」という意志がこのタイトルにこめられている。そのため「秋田の未来をこう切り開く」と題した若者8人によるプレゼンテーションをその中心に配置した。立場や来歴、目指すものは異なるが、皆それぞれ前向きに実践しようとしている若者たちである。前半は、『日々の暮らし・生業から未来を考える』と題して4人の方に、そして、後半の4人には『秋田の良さは何か』を追究してもらう。彼らの話からきっと秋田の未来像が見

えてくる。

もう一つの副題を“なまはげ・こまちを超えて”とした。秋田でこのタイトルをつけるには若干勇気がいった。しかし、私たちはなまはげやこまちを否定しているわけではない。むしろ、伝統・文化の良さをしっかり踏まえた上で次の一步を踏み出そうという気持ちを込めたつもりである。最近「秋田人は変わらなければならない」とよく言われる。しかし、変わればいいと言うものではない。むしろ重要なことは、『変えてはいけないもの』『大切にすべきもの』は何なのかを十分に認識することではないだろうか。8人の話を通じて、私たちが秋田で大切にすべきものは何なのかが浮かび上がってくることだろう。

この企画をしながら、私は若い頃によく歌ったフォークソング「友よ」の歌詞を思い浮かべた。『♪友よ、この闇の向こうには、友よ、輝く明日がある…♪友よ、のほり来る朝陽の中で、友よ、喜びを分かち合おう！♪』さあ、みんなで輝く未来を探しに行こう！

未来を切り拓く

Yokotter 細谷 拓真



横手市の街興しを3年半位やっています細谷拓真と申します。本業は医師をしており、4歳の息子ともう少して1歳になる娘と妻の4人で生活をしています。今回は「未来を切り拓く」をテーマに話を進めて参ります。

皆さんは「この自然は未来の子供たちからの贈り物」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。私たちが預かっている大地は、過去から受け継いだものであると同時に将来子供たちに届けるべく預かり物であるという言葉。アメリカのある地域の原住民の言葉です。

2050年には日本の人口は9千500万人、25%位減ります。一人暮らしの高齢者は2倍になります。2100年には人口は5千万人を割ります。横手市の0~14歳の人口。私が生まれた1978年には2万4千人、それが今では1万1千人。私の子供が20歳になる前には6千人にとものすごいスピードで減っていこうとしています。皆さんのご子孫はこの秋田で生きようという選択肢は持てるでしょうか。一体子供の数はどこまで減少していいものか、いつも僕が考える悩みです。秋田県では昭和30年には3万人子供が生まれていた。現在は6800人。結婚して子供が生まれる率は昭和55年7.3%、現在は6.8%、さほど変わっていない。しかし有配偶者率がものすごく減った。50歳の男性の未婚率は1990年6%、2010年20%。つまり20%は結婚していない。更には15~49歳の女性の人口そのものが減っている。何が問題なのか、この年代の女性が秋田に住むということができない、もしくは住みたくないという現象が大きな問題なのではないか、と考えるようになりました。

もう一つ危惧しているのは、秋田県では100人中9人しか大学を卒業していない。これはぶっちぎりの全国最下位。全国平均17.1%の半分です。私が大学に入った頃は100人のうち30人位しか進学しなかった。今や半分が進学する。にもかかわらず100人のうち9人しか住めない。そういう中で私の社会問題は、0~14歳の人口減少に歯止めをかける動きをしなければまずいんじゃないかということ。15~49歳の女性の人口を何とかしなければならぬ。大卒者の雇用も増やさなければまずいんじゃないか。

その中でどう動くか。秋田に住む者が秋田を

誇りに思えないで誰が秋田に惚れるか。何か秋田に惚れるような活動をしなければいけない。横手焼きそばがいくらおいしくてもそこに惚れるわけではない。やっぱり人なんだと思います。私達NPO「Yokotter」は「この街で子供を育てたいといわれる街へ」をスローガンに活動しています。その中で数々の人と出会いました。それを大きく2つに分けて考えると、まず、マーケットファースト。自分を生かしてくれる場を求め、渡り鳥のように世界に飛び立って行く人。その反面、私のようなルーツファースト。自分のルーツを何とかしたい、ここで夢を叶えるために辛い道であっても駆け抜けて行こうという人。この2つの人たちは一緒にはなれないかと思っていた。それが一緒に力を合わせるできるようになった。それが私たちのソーシャルメディアの街興しだったのかもしれない。

地元に戻ってすぐに毎月第3日曜日に市場をやってみたり、県南と県北を融合するイベントを開いたり、様々な活動をしてきました。様々な人たちが個人の力を通してつながって、それが人を動かす。一人ひとりがメディアになるという時代が到来した。このオンラインとオフラインをどうつなげてゆくのか。僕がやっているのは「場作り」と思っています。常設の場がほしいということで、80年以上経った石の蔵を改築して高校生とディスカッションしたりする活動もしています。

次の一手。私がやろうとしているのは行政区域はどうでもいい。自分たちのテリトリーは半径50km。「フィフティあきた」を立ち上げたいと思っている。もっと遊ぼう、お客さんと一緒に楽しもう、そういうような活動をしていきたい。地域や地域の人に惚れてくれる人を増やしたい。これが僕が作っていききたい今後のメディアです。

私たちが祖先から引き継いだこの秋田は未来の子供たちからの預かりものという心を広めていきたい。何を残し、なにを生みだし、未来に届けるべきでしょうか。すべては未来の子供たちのために。どうもありがとうございました。

地域とつながり、みんなが元気

子育てカフェ・にこリーフ 小玉由紀



私は、H17年6月に一杯のコーヒーでみんなが元気になり、幸せが広がりますようにとの願いで、「子育てカフェ・にこリーフ」という親子で集まる場作りを男鹿市内で始めました。

主な活動としては、親子で集う「子育てカフェ」、子育て用品の交換会「フリマカフェ」、親子で楽しむ「吹奏楽ミニ演奏会」などがあります。昨年（H24年）は、男鹿の昔ながらの生活の知恵やいざという時のための対処法を学ぶ「親子チャレンジクラブ」を開きました。1年間男鹿の自然の恵みを生かした生活を学びながら、山菜採りと塩漬け、サバイバルキャンプ、お家キャンプ、味噌づくり、がっこ作りなどにチャレンジしました。

これまで8年の活動は少しずつ、その範囲を広げ、人とのつながりを深めてきましたが、それを通してつくづく感じたことは、地域にとって子どもがみんなを元気にする光の存在だということ。そして、子ども中心に行われている祭りや行事などを通じての地域の連携が、より良い子育て環境を作っているということ。ですが、じゃあ、なぜ若者の流出は止まらず、なまはげや祭りなど地域の大切な文化をつないでいく事が本当に難しくなっているのでしょうか。私たちの活動は、その問いかけを大切に、自分たちだけでなく、みんなと一緒に考えたいな、という思いでいっぱいです。

どうしたら若い人が男鹿に住みたくなるのか、仕事が無い事だけが原因なのか、自分達でできる事はないかと思うようになりました。

男鹿には昔ながらの生活の知恵がたくさんあったお母さん達の文化があります。でもその一方で地域のあちこちで担い手が不足しています。地域のお母さん達が受け継いで来た知恵の数々はこのままでは消えていきます。便利になっていく暮らしの中で、大切に守っていききたい事、私達が「地域のお母さん達が受け継いで来た知恵の数々」を学んで伝えていきながら、今まで活動してきた仲間づくりを基本に、さらに地域にもつないでいけたらと思いました。

将来的な目標として、子育てを中心に地域とつながり、みんなが元気になれる場所を作ろうと考えています。みんなが子育てできるお家、加工場付き、古民家で小屋、畑もある場所が理

想的です。

内容としては、まず地域の人が集えるカフェスペース、子育ての学びの場や情報交換できる場、お母さん達が安心して子育てを共有し喜びを感じられる場所です。

子ども達は、畑や外遊び、地域の人と触れ合ったり、本を読んだり、五感をフルに使って過ごせる場所。放課後の子ども達が宿題したり、おやつを食べたり、小さい子と遊んだり、子ども同士がけんかしながらもみんな楽しく過ごせる場所。（とても理想ですが）

そしてもう一つチャレンジしたいのは、お母さん達の小さな仕事につながる場を作りたいということです。小さい子どもがいるお母さんがどこかに勤めるのではなく、その時しかない子育ての時間を大事にしながら、ちょこっと仕事や作業できるスペースです。

畑作業から、山菜採り、年間を通した保存食作りや味噌作り。けのこ汁、あんぷら鍋など、伝統食、郷土食など地域の人と触れ合いながら、男鹿での暮らしを体験しそれが自分達の生活に根付き、いずれ加工品作りなどへと活動が自立できる方向へ発展していくよう、みんな考えていきたいです。

まずは、無理せず自分達の生活のためになる活動から、子どもに安心な食、自然いっぱいの男鹿で子育てする良さを発信し、秋田県内、県外へ輪を広げていけたらと思っています。

「あんたがた遊んでいるだけだべ！」と言われる私達ですが、子育て中の若い人が、収入が少なくてもなんとかやりくりして子育てしていけるように、みんなが助け合いながら、それぞれの得意な事やできる事を集めて、男鹿で生きていく道を探っていけたらと思います。

最後に、流出した人達が、将来男鹿で暮らす方が楽しそうだな、住んでいる人の心が満たされる地域作りを目指して、これからもみなさんの力を借りながら活動していきたいと思えます。

プレゼンテーション3

「鍋」

あきた農業近代化ゼミナール 中村 光 心



秋田農業近代化ゼミナールの事務局長をしています中村光心です。

これから農業は激動の時代を迎えます。農業人口の減少は加速しています。農近ゼミは昭和50年代、「会員は千人を割り込み危機的な時代となった」と記録されています。それから30年。現在の会員数は100人を切りました。

私は鹿角市でリンゴ、桃、稲作を生業としていますが、子供の頃は村の端から端までリンゴの木で何も見えない地域でした。現在はリンゴの木はほとんど伐採されて村の端から端まで見渡せる状況になっています。もちろん後継者不足からです。とても寂しい。

TPPの問題も避けては通れません。参加がいかどうか一概には言えませんが、農業は大きな打撃を受け全国の農業生産額は8兆円を割り、何も対策を取らないときには3兆円の減少となるそうです。8分の3の農家がなくなるとも考えられます。米どころ秋田。今朝ここに来る間にも多くの農家が農作業をしていました。10年後この人たちが農業を続けていられるのか。

私の意見を述べたいと思います。まずは少なくなればなるほど若手農家同士の交流が重要になってくると思います。農近ゼミでは先日全県から集まったゼミのみんなで秋田駅前直売し、終わってから意見交換をしました。こういう交流が大事だと思います。

また、儲かる農業をすることが重要。稲作であれば大規模経営、自家販売の2極化となるでしょう。自分で作ったものは自分で売るという形態が求められています。

新しい産業の育成も必要です。鹿角市では「北限の桃」を栽培している。20年ほど前、ある先覚者が山形県の桃づくり農家から勧められ300本の苗木を買って仲間に配ったのが始まりです。今では出荷額は1億円を超えた。このような新しい産業の育成も重要ではないでしょうか。

新規就農者の支援も忘れてはなりません。農外には農業を魅力的だと考える人が沢山います。現に秋田市出身者で鹿角市に農地を持ち果樹栽培を始めた方が私の仲間にあります。そういう人のためにも若手農家会の仕事を続けて行き

たいと思います。

以前弘前大学名誉教授と話したことがあります。「私はリンゴのことがわからなくて悩んでいます」と言ったら「中村君、君がわからないだけでリンゴの木は君に話しかけている。その話が聞けたらリンゴの栽培なんて簡単だよ。日本語や英語よりもリン語を勉強しなさい」と答えられました。帰ってリンゴの木に耳を傾けたけれども私には話しかけてくれません。まだまだ未熟者ですが、こういうことを通じて農業は魅力的な産業だと思ふようになりました。そして地域として守ることも私たちの世代の責任ではないかと思っています。

農業の話はこの辺にして、私はいろんな団体に所属していろんな活動をしておりますのでその話も少しさせていただきます。

私の趣味は卓球です。スポーツを通して何か地域興しができないかとNPO「鹿角くらすた」というスポーツクラブを作って活動しています。会員は130名位。80歳から4歳までの会員がいます。子供たちには技術だけでなく挨拶とか人間としての基本的なことを教えたいなあと思い活動しています。バドミントンをやってみたくて市内のバドミントンクラブに参加し、ネットラジオの団体から来てみないかと言われ、花輪囃子の活動に参加してみないかと言われ、更には鹿角ゲットアッププロジェクトというところに呼ばれ司会をしてくれと言われ…そこはネイガーを呼び、夜はロックフェスティバルをやるという楽しい活動でした。

このようにいろんなところに顔を出して思うことは、地域の活力がなくなっていることに気がついている人はいる。そして動き始めています。

私は秋田の未来を漢字一文字で表せといわれ、「鍋」と答えました。もちろん秋田名物きりたんぼの鍋です。でも、たんぼだけ、ネギだけ嚙ってもおいしくない。いろんな人とか団体とかを詰め込んで煮たらおいしくなるんじゃないか。その鍋をつつきながら酒を酌み交わしたい、人の和を醸したいというのが私の考えです。ありがとうございました。

究極のマイバッグ

あきた地球環境会議 東海林 拓 郎



私は、「究極のマイバッグ」と呼ばれる買い物袋を用いて、少しユニークな買い物スタイルの提案をしています。ここでは、その活動コンセプトや内容を紹介したいと思います。

■活動のコンセプト

過去に起きた環境問題の発生とその克服の歴史の中に、「価値観の変化」が存在したという考え方があります。例えば、公害問題に対しては規制や代替物質の利用、オイルショックには省資源といった、それまでに見られなかった新たな価値観への変化が見出せるというものです。

では、私たちの未来に起こる環境問題を克服するとき、どのような価値観の変化が求められるのか。この答えを導くのは簡単なことではありませんが、その時の社会は「穏やかな社会」であることは間違いないように思います。これは、昔はどのような社会であったかをインタビューした「90歳ヒアリング」という研究の中で見出された“共有”“保存”“使い切る”“多目的”“コミュニティ”といったキーワードから、未来へと続く一貫性として「穏やかさ」を感じたためです。転じて、若者にとっての「穏やかな社会」には、“便利（無理が無い）”“お金がそこそこある（収入・仕事）”“楽しい”といったキーワード・要素が入ってくると思います。私の活動は、この「穏やかな社会」の生き方、すなわち、上記のキーワードや要素のうちいくつかを満たすライフスタイルを提案することです。



■活動内容

今回紹介するのは、“使い切る”“便利（無理が無い）”“楽しい”“多目的”といった要素を含むライフスタイルの提案で、レジ袋削減を目

的とした「究極のマイバッグ」の開発と普及活動です。秋田県内では、これまで行われてきたレジ袋有料化やマイバッグ持参の取り組みがなか

「究極のマイバッグ」による ライフスタイルの提案



なか定着していません。私はこの理由を、これまでの取り組みが、消費者、事業者、自治体等の関係者の誰かに負担や無理を強いてしまっているためだと考えました。そして、皆が納得する仕組みの必要性を感じ、一つの解決策として考案したのが「究極のマイバッグ」構想です。県内の約1,000名の消費者、20事業者、24自治体を対象に行った色、形状、生地、価格等に関する意向調査や使用モニター調査を通じて、皆の「いいね!」を集め、「究極のマイバッグ」として完成させました。現在は、「究極のマイバッグ」に関する情報、モノ、カネの流れをイメージしながら、関係者の皆が窮屈しない普及方策にチャレンジ中です。

スーパーのレジ周辺が、消費者の持つ緑色の「究極のマイバッグ」で埋め尽くされる様子を想像すると、ワクワクしてしまいます。それは、このバッグが広がることで、将来起こりうる環境問題を解決した社会が持っている価値観に一步近づけた気になるからだと思います。

■最後に

この地域力フォーラムin Akitaでは、登壇者の活動のコンセプトやビジョンを聞くことができ、多くの刺激を受け、自分の課題を見つけることができました。また、実行委員の「大人」の皆様からは、若者に秋田を引っ張ってほしいという、熱く温かい思いを感じる機会にもなり、秋田を好きな理由が一つ増えました。本当にありがとうございました。

「秋田美人モデル」をいかに発信するか

モデルクラブStella 原田 裕 成



只今ご紹介にあずかりました原田です。
男鹿市出身で、今年26歳になります。秋田高専を4年生でやめて、2、3年準備期間を置いて事務所を始めて4年目になります。

秋田を中心に、広告などの媒体でテレビ番組に出たり、CMに出たり、そういうものを取りまとめることをやっています。今日のテーマは「秋田の未来をこう開く」ということですが、秋田を盛り上げるきっかけ、入口を作ればなあ、と思っています。

盛り上がるということはどういうことかという、賑わいがあることではないか。秋田駅前の賑わいが秋田を盛り上げることになるのではないかと考えています。

では賑わいとは何なのか。僕の中で考える要素は、人、場所、情報。これが賑わいに必要な三つの要素だと思っています。

「人」がいるところは盛り上がっていると感じる。人を集めるには何が必要か。それは「場所」だと思います。では、どんな場所に人が集まるかという、「楽しい場所」「何かを得られる場所」に集まるのではないかと。

「楽しい場所」とは、買い物ができたり、おいしいものが食べられるとか、楽しいイベントをやっていたりということ。「何かを得られる場所」とは、美術館があって芸術を感じられるとか、すばらしい風景があるとか、そういうところ。場所ではもう一つ、アクセスのよさ、交通の便のよさということもある。中心になる場所、アクセスがいい場所が人が集まる場所になるのではないかと。

ただ、いい場所があっても知るきっかけがないとその場所には人は集まらない。もう一つの要素の「情報」は、テレビコマーシャルとかポスターとかのことですが、しかしそれだけで参加する人は少ないと思う。情報で一番強いのは人から人への口コミだと思います。人から人への情報。

人、場所、情報という賑わいの三要素を持っている場所。それは僕は駅前だと思っています。ただ秋田ではむずかしい。秋田には秋田に合った街の作り方があっていいのではないかと。

話は変わりますが、僕が事務所をスタートさ

せたきっかけは、高校3年のとき、当時高3の女の子たちが東京でやっているファッションイベントを見て、秋田でもこういうイベントをやりたいという話があって、3カ月くらいでイベントを立ち上げ、いろんなところに張り紙をしたりして人を集め、最終的に150人くらい学生を呼んでイベントを終えた。それから毎年、1年に1回ファッションショーをやっていく中で、今のモデル事務所という形になりました。

当初中心メンバーで頑張ってくれた子たちは、今は東京でモデルをやっていたり、デザイナーをやっていたり、いろいろな分野で頑張っていますが、みんな関東にいる。秋田に残っているのは1人、2人です。それはなぜかという、秋田には自分を活かせる場所がなかったからです。

逆に秋田にモデルをやりたいという子がやれる場所、デザインをやりたいという子がやれる場所があれば東京まで行く必要はなかった。

秋田に場所を作るとのこと。秋田のブランドといえば食べ物ではハタハタ、きりたんぼ、芸能では竿燈、なまはげ、風景では男鹿、乳頭温泉など沢山ありますが、「秋田美人」も秋田の一つのブランドではないかと考えています。それがきっかけでモデル事務所という形になった。秋田美人のモデルを使えば情報が作れる。例えば佐々木希さん、加藤夏希さんのような人気者を作ることができれば人を呼ぶことができるのではないかと、モデル事務所を作ればすべてできるじゃん、と思ってスタートさせました。

強みは素材が「物」ではなく「人」であること。「人」なので何にでも合わせられる。例えばきりたんぼのCMに合わせてみたり、いろんな形で合わせられます。

逆を言えば合わせる物がないと新しい物を生み出せないということでもあります。従って私の事業は誰かと手を取ってゆかなければむずかしい事業なのだと思っています。

ぜひ私たちに場所を作るきっかけや機会やあるいは資金など、皆さんの力をお貸しいただければと思います。

秋田から世界へ

国際教養大学 須崎 裕



私は大阪出身の28歳、現在国際教養大学に通っています。大学入学を機に秋田に来て初めに驚いた事は近くを流れる川の美しさでした。「上流にはどんな景色があるのだろう？」大阪から持ってきた自転車に乗って上流を目指しました。田園風景を進むこと数時間、大きかった川は清流となり、太陽の光を浴びた魚がキラキラと輝いていました。まるで自分が「図鑑の中にいるような」感覚になりました。それからというものの週末になると外に出て素晴らしい景色と暖かい人々に出会い秋田が大好きになりました。

一方で、秋田にはたくさんの課題があることも肌で感じるようになりました。夕方を過ぎると閑散として行く秋田駅前、農家では人手が足りずに収穫できなかった作物が畑に残っていたり、耕作放棄地となった里山も見ました。たくさんの人で賑わっていた頃の面影だけを残している光景を見た時、やはり寂しい気持ちになりました。秋田が抱える課題を解決することに強い関心を抱くようになりました。

秋田からなぜ人が出て行くのか？その原因は秋田の資源（リソース）が価値化されていないことにあります。米所と表されるように秋田県は昔から食が豊富にあり、当時の人々が求めていたものでした。秋田は豊かだったので。そして環境は今も大きく変わらず食料自給率は北海道に次いで全国第二位です。秋田のリソースは変わらず存在するのに、その価値を見出す人が少な過ぎることが大きな問題であると思います。

ではなぜ秋田の価値は広まらないのか？まず秋田の人々自身が秋田の魅力を知らないということです。例えば、私が通う国際教養大学では初雪の日、構内に雪だるまが何十個も出来ます。作ったのは台湾や南米、沖縄から来た学生達です。彼らの多くは深々と積もる雪を見た事がなく初雪を心から喜んでいました。秋田の方々にとって雪は当たり前で面倒なものに映るかもしれません。しかし、見方を変えると人の心を躍らせる素晴らしいリソースとなり得るのです。

次に規模の問題です。実際、秋田を県外に出す活動は多々ありますが、成功例がなかなか出

てきません。それは活動規模の小ささが原因の一つではないでしょうか。例えば、おばあちゃんが作るがっこ（お漬け物）は秋田のリソースの一つです。しかし、県外ではほとんど見られません。これはおばあちゃん一人が作れるがっこが少ないことに原因があります。県外に売り込むにはどうしても一定の量が求められ、その為には作り手を集めるネットワークの構築が必要となります。

最後に県外へ発信する営業役がないということ。秋田のリソースの多くは農業、漁業、林業や工業など地域生産者の方々から起きている。生産者の方々が県外へ営業に行く事が可能でしょうか？生産から加工、販売まで担う6次産業が必要とされていますが、実際に生産者が今以上に活動範囲を広げることは現実的と思えません。秋田に残る伝統的な生産技術を生産者のもとへ残す為にも、代わりに県外へ売り歩く、営業専門の人間が必要ではないかと考えます。

秋田の魅力を外へ発信するため、私は現在「外国人専用の秋田体験観光プラン」の企画を行っています。具体的には外国人と一緒にチームを組んで県内各地に入り、地域の方々と一緒に商品開発を行います。文化の違う外国人メンバーは秋田のリソースに新しい魅力を与えてくれます。また、衣食住を伴う観光商材は秋田の多様なリソースを一つに纏めるのに役立ちます。そしてソーシャルメディアや紙媒体を活用して日々世界へ発信しています。

秋田の魅力を世界中の人々に伝えるように価値化し共有することで、秋田を好きになる人が今よりも少し増えれば、秋田はその魅力を維持し続けられると確信しています。グローバル化が急速に進み、世界が単一化して行く中で秋田の価値を世界へ広める試みは国内他の地方のみならず、世界中の多様性を継承して行く為にも大きな意義があることだと思っています。一歩ずつではありますが、着実に前へ向かって行きます。秋田の皆さん、是非ご一緒に、よろしくお願い致します。

秋田にとりつかれた人

秋田県立大学 齋藤千尋



初めに、私は秋田が大好き！です。しかし、以前は「秋田には何もない」と思っていました。その考え方は大学在学中に出会った人々によって大きく変わりました。

私は幼いころから「好奇心旺盛にまずは挑戦してみる」精神で、できないことや危ないこともまずは挑戦してきました。ボーイスカウトの入団をきっかけに、野外での遊び方やクリーンアップや募金活動などから奉仕の心を学んだことで、自然観察や、ボランティア活動などに興味を持つようになりました。

秋田県立大学に入学した1年目に東日本大震災が発生し、2011年4月に初めて被災地で活動しました。思っていた以上の被害を目の当たりにして、自分に何かできないのかと考え、数十人の大学の仲間たちと被災地支援サークル「u p ← A」を設立しました。u p ← Aは、岩手県、宮城県を中心にがれき撤去や、住民と会話するイベントなどの企画、運営をしています。その活動の中で出会った「Re R o o t s（宮城県仙台市若林区）」との関わりがきっかけで秋田のことを考えるようになりました。Re R o o t sは東北学院大学などの仙台市にある大学に通う学生が多く所属し、「復旧から復興へ、そして地域おこしまで」というコンセプトで若林区の農業の復旧・復興活動をしている一般社団法人です。Re R o o t sと出会ったころは震災発生から2年経ち、被災地の支援が大きく減った時期でした。その中で復旧・復興活動を続ける原動力が知りたいと思い、Re R o o t sに所属する学生たちに「なぜ活動を続けるのか？」と聞いたところ「愛着があるから。」という答えが返ってきました。若林区出身が多いわけではない団体から聞いたその答えは私の中で衝撃でした。私はなぜ秋田にいるのかと、私に対して疑問を持ちました。

秋田と言えば、地域力フォーラムのタイトルにも入っている「なまはげ」や「秋田小町」、他に「お米」や「竿燈」などがイメージできます。しかし、よくイメージされる秋田の特徴は私の生活に馴染みがなかったせいか、これだ！と思うものはありませんでした。そのため、なぜ秋田にこだわるのか、さらに分からなくなった私は、その答えを探すために県内外のイベン

トに積極的に参加するようになりました。その結果、知り合った人を通じて私の知らない世界を広げることができ、多くのつながりをもつことができました。そして地域活性のために夢を語る、素敵な方々に出会いました。私はその世界が広がる感覚を広めたり、そんな素敵な人になりたい、と漠然と思いました。

私は野外で活動することが好きで、田んぼからオタマジャクシを捕まえてカエルまで育てたり、登りやすい木を見つけて長い時間そこで過ごしたりするような子どもでした。今ではその遊びの延長線で、大学では長靴とカッパを着て森の中に入っています。その経験を活かして、秋田の自然の魅力を伝える自然観察ガイドになりたいと思うようになりました。秋田の自然が特別な何かがあるわけではありませんが、自然の中で遊ぶことの楽しさを知っている秋田の人は少ないように感じます。身近にこんなにも多くの遊ぶ場所や、息抜きする場所があるのに、活用の仕方を知らないだけで「ただの田舎」だと思うのはもったいないです。

正直、私は未だになぜ秋田にいるのか、その答えを言葉にすることができません。しかし、県外に出たときの違和感と、県内にいるときの安心感があります。今までは「何もない」と思い込んで魅力を探そうともしませんでした。今は秋田の魅力を見つけられるようになりました。その魅力はガイドブックに載るような大きなものではないですが、探せば探すほど秋田の魅力は深まっているように感じます。

秋田人が秋田を大好き！と声を大にして言えるように、秋田の魅力を引き出す自然観察ガイドに私はなりたいです。目標は「子どもも、大人も“ワクワク、ドキドキ”してもらおう」ことです。一人前の野外観察ガイドになれるように努力していきますので、秋田の自然でお会いしましたらよろしく願いいたします。最後になりますが、今の私は秋田が大好き！と心から叫ぶことができます。そんな秋田人がたくさん増えるように、まずは秋田の自然を楽しんでもらいたいです。

市民が未来を創造する

大学卒業後、8年間、経営コンサルタントとして、企業の変革に携わってきました。その後、フィールドを英国に移し、「持続可能な社会づくり」をテーマに大学院で研究をしていました。7年前に帰郷し、現在はS i N Gという社会活動団体を立ち上げ、「環境に優しい豊かな社会を次世代に」という目標を掲げ活動しております。

帰郷してまず感じたのは、「この街には遊び感覚が感じられない」そして、「自分の街を自分のことのように思っている人が少ない」という2つのことでした。活力ある豊かな社会を実現する上で、どれだけ多くの人々が地域社会に対する当事者意識を持つことができるか重要だと考えます。そこで、もっとたくさんの人が街に出かけ、街を感じ、街で遊び、街を謳歌する、そのための仕組みや仕掛けの演出が大事だと考え、この7年間で市民が誰でも参加できるチャリティ活動や街の魅力を感じてもらうイベントを企画・運営してきました。うれしいことに、積極的に街に遊び場をつくる人、そしてそれを楽しむ人が少しずつではありますが、増えてきているように感じております。

次世代につながる豊かな社会を構築する上で「市民主役型社会」と「地域創造型社会」という2つの考え方を浸透させることが必要だと感じております。

「市民主役型社会」はあくまでも社会の主役は市民や企業あり、行政との関係においてもより主体的に行動していくべきだということです。

また、「地域創造型社会」は前例やしがらみなどに左右されることなく、必要なものは創造していく、必要性の基準は過去から学び、次世代を思い、現世代で精一杯のことができているかどうかということです。

ここでこれまでの活動を紹介します。まずは、「ベロタクシー」という乗り物を秋田で走らせております。この乗り物は不思議な魅力をもっておりまして、見かけた人も乗車した人もドライバーも、全員が笑顔になるような乗り物です。遊び感覚のあふれる街づくりを考えたときの活動の第一弾でした。次に「商店街スゴロク」です。これは商店街をスゴロクの盤面に見立て、サイコロの出た目に従い、商店巡りを楽

SING 武内 伸文



しんでもらうものです。普段は立ち寄らないお店の魅力をゲームを通じて体験してもらい、お店と市民との出会いを演出したイベントです。次は「市民パレード」です。様々な活動団体が一緒になって自らをPRする恰好で行進します。様々なジャンルの団体が連携することで、よりパワフルな情報発信が可能となります。参加団体はだんだん増えてきており、今年は500人以上のパレードを予定しています。最後に「アキタ・パウル街」を紹介します。およそ60店舗が参加。参加者は参加店マップを片手に、街角で踊りや音楽のパフォーマンスを楽しみながら、お気に入りのお店をハシゴします。街に魔法がかかったように、多くの参加者や店主が笑顔で交流を楽しめるイベントです。

このように、遊び感覚を交えた演出をすることで、「市民主役型社会」や「地域創造型社会」が加速的に浸透していくことを実感しております。

最後に社会創造に関連した3つの提案を紹介します。まずは「ライフスタイルのブランド化」です。農園レストランを開業するなど豊かな食や自然を謳歌するライフスタイルを求めて移住する人々が増えています。この土地の暮らしの魅力を見つめ直し、上手に伝えることは、新しい社会を構築する上で重要な役割を担います。次に外にだけ情報を発信するのではなく、市民がもっと地域の豊かな資源を味わうことが必要です。秋田県が整理した県内の地域資源のデータベース（食材、伝統、人など）があります。まずは市民がそれらを知り、体験することがスタートです。最後に「超高齢化社会への挑戦」です。医療・福祉において、また都市交通やコミュニティのあり方まで、高齢化社会の先頭を走るこの秋田での様々な挑戦が市場創造に繋がると考えます。



4. 総括講演

新しい共同体の思想

立教大学大学院教授 内山 節氏



40年前から群馬県上野村と東京との往復生活をしています。この村は96歳が森林、田んぼが一つもないという山村です。村の高齢者と話をしながら考えているのは、これからの世界は「地図を広げて見る世界」ではないということです。

上野村の人口は1400人、高齢化率は40歳で人口も高齢化率もこのところ変化していません。外から来た人が、260人ぐらいがいます。歴史的に見ると律令制の時代から「領主」がいまませんでした。ここの人たちは、国や県から命令されるのを「気持ちいいとは思わない」と言いますか、「ここは自分たちの村だ」という意識が強いです。

村では今、三つの課題を追っかけています。

一つ目は「できるだけエネルギーを自給したい」という課題です。村には間伐材をチップにし、そのチップを木の玉状にしたペレットを作る工場があります。目標は今年度中に、すべての暖房をペレットに替えることです。学校などの公共施設は切り替わっています。ストーブが一番安いのも30万円ぐらいしますから、個人向けには村で買ってリースする方法を取ります。

二つ目は電力を作れないかということで調査、下準備に入っています。村内の砂防ダムを利用、基本は小水力、マイクロ水力になると思います。うちの村は村民の平均所得という数字だけ見ると、日本を代表する貧乏村です。村を独立国として考えると、最大の問題は「エネルギーの赤字」。電気、ガソリン、灯油、ガスを百歳「輸入」している。エネルギーの輸入を止め、自然エネルギー、地域エネルギーを使って、最終的には自給できる仕組みを作り上げたいのです。1400人の村だから、ペレットだけで暖房ができ、川の落下水量で電気が賄える。ようやく、小さいからできること、が発見されつつある気がしています。

江戸時代、人口と同じくらい馬がいた上野村の三つ目の課題は「馬とともに暮らす村」です。1馬力で暮らすのは無理。それでも「1馬力の暮らしをしよう」を旗印にして、これからの生き方を考えていった先にこそ、理想があるかもしれません。「日本の本当の原風景」を見

なければ、上野村に行けばいい、という噂が立つような、世界に開いた村にしたい、とも考えています。

戦後は巨大なもの、あるいは国に依存しながら生きてきました。それがここに来て大きなものは、すべて破たんし始めました。国は財政的な破たんに陥り、大量生産して世界中にばらまく企業は、経営が苦しくなってきた。強国日本を目指し、日本人が一本化していく歴史、その歴史もそろそろ終わっていいなあ、と思っています。日本人である前に、自分が結び合っている世界、そこにこそ自分たちの生活がある、それを語る人間にもう一度、戻ってもいいかなという気がしています。

上野村のペレット工場はすべてコンピュータで管理していますが、東京でコンピュータ系の仕事をしていた人が、工場の責任者です。かつて村は薪で暮らしていました。それが厳しくなった。そこにペレットという新しい技術を入れる。村の木をエネルギーに替える。伝統社会への回帰につながったのです。内の頑張りだけでなく外から加わって来る人、外から協力してくれる人が絶対的に重要なんです。

「地図を広げて見る世界」ではなく、祭りや年間行事を通して祖先とのつながりを感じ、自然とのつながりも感じ、すべてが自分の生きている世界で感じられる社会を作っていくのが、これからの共同体の思想だし、これからの社会の考え方なのではないかと思っています。

みなさんと一緒に、これからどこかで協力していければいいな、と考えています。(了)

5. アンケート結果

参加者へのアンケート結果（抜粋）

- ・配布 約190枚 ・回収 53枚
- ・回収率 27.9%

設問1) このフォーラムを何で知りましたか (複数回答可)

新聞6名(秋田魁新報4名、朝日新聞1名、河北新報1名)

雑誌9名(かがり火8名)、知人24名、チラシ11名、フェイスブック6名、ポスター5名、実行委員2名、ラジオ・娘から・秋田経済新聞・インターネット・職場・ホームページ 各1名

設問2) 会場へのアクセスはいかがでしたか？

- ・わかりやすい・駐車場が広い等肯定的なもの 28名
- ・他に「車がない人には不便かも」「迷った」「少々遠いが何とかなる距離」「普通」「駅から遠い」など。

設問3) 会場の設備はいかがでしたか？

- ・良い・特に問題はない等肯定的なもの 30名、
- ・部屋が細長く講師や板書が見辛かった 7件。
- ・他に「駐車場が思ったより少なかった」「机の席に付けなかった」「窓があったらよかった」「空調が寒かった」など。

設問4) 来年度以降に向けてのご意見を

●継続について

- ・今後もこのような企画を望む。
- ・来年も期待しています。
- ・是非来年も継続してください。
- ・参加費1000円は適当。
- ・有料でも次回も参加したい。
- ・県内各地の若い人が交流しながらつながる場としてこのフォーラムが継続されていくことを期待している。
- ・次回もインフォメーションを欲しい。
- ・お手伝いできることがあれば嬉しい。
- ・HPからの申込フォームがあると便利だ。

●内容あるいはテーマについて

- ・地域活性化と「女性力」。
- ・今回発表の若者の活動と絡めた発展的な

もの。

- ・若者からのメッセージをメインにするとよい。
- ・県外から移住した人の話を聞きたい。
- ・「アートやクラフトでまちを活性化」をテーマに。
- ・若者と熟年者がコラボする街づくりフォーラムとディスカッション
- ・秋田のルーツ、歴史にかかわった人たち。

●形式について

- ・フロアも巻き込んだ議論を。
- ・パネラー同士のディスカッションが欲しかった。
- ・参加者がトークに参加できるようグループ討議等は。

●ゲストについて

- ・全県から(地域振興局単位ぐらいから)発表者を。

●広報や集客について

- ・もっと若者、次世代の担い手を参加者にも巻き込んで。
- ・すばらしいフォーラムなので今回以上の広報を。
- ・高校生など若い世代にも参加してもらえる工夫を。

●その他

- ・活動をしている人を来場者が支援する仕組みに一考を。
- ・質問タイムの際、手をあげてもプレゼンターしかあたらなかった。平等にあてるようにして欲しい。

6. 広 報

フォーラム開催前後、多数のメディアにとりあげていただきました

平成25年7月26日(金曜日)

地域力フォーラムinあきた

7月28日、秋田温泉さともみで

明日の秋田を創ろう
県内のNPO団体などで
作る「地域力フォーラム
inあきた」が、7月28日
午後1時から秋田温泉さ
ともみで開催される。

基調講演は高知県馬路
村でユズの加工販売を
して年商30億円の収益を
上げていた同村農協の東
望史組合長、総括講演は
立教大学大学院教授で哲
学者として著名な内山節
氏が行う。フォーラム
の発表者は県内
各方面から推薦
を受けた若者8
4名で、それぞれ
に地域興しの取
り組みを発表す
る。

発表会実行委
員長の関徹彌氏
018・8335 0114
5(関さん)まで。

問い合わせは事務局
018・8299 5801

対話 会話

2040年の県人口は70万人を割るという推計が激震を呼んでいるが別に驚くことではない。なぜなら本誌前年12月14日の記事では、県議会が「子育て特別委員会」から「2100年の県人口は70万人になりかねない」というシミュレーションの結果が示されている。県側はこのまま少子化傾向が続くと仮定した場合の一つの試算の公式推計ではないとしていたが、県議会側は「シミュレーションが数字。それと本県の少子化対策の早期実施の必要性をあらためて認識した」とある。

地域力フォーラムに寄せて

「この記事が今、40年の推計人口「70万人」を割るという推計が激震を呼んでいるが別に驚くことではない。なぜなら本誌前年12月14日の記事では、県議会が「子育て特別委員会」から「2100年の県人口は70万人になりかねない」というシミュレーションの結果が示されている。県側はこのまま少子化傾向が続くと仮定した場合の一つの試算の公式推計ではないとしていたが、県議会側は「シミュレーションが数字。それと本県の少子化対策の早期実施の必要性をあらためて認識した」とある。

サポートしている地域づくりフォーラムは、秋田でも開催した。その時、目を覚ました。

早速、仲間と「地域力フォーラムinあきた」実行委員会を立ち上げた。テーマを何にするか議論を重ね、「県内では大勢の若者が地域づくりに前向きに取り組んでいる。その若者たちに熱い思いを語りつづける場」

「地域力フォーラムinあきた」を立ち上げた原田裕成さん(同▽4人の子を育んでいる小町の活性化に取り組んでいる小玉田紀さん(男鹿市)▽さきまな分野の社会貢献活動を展開している武内伸文さん(秋田市)▽観光分野の起業を助中の教養大学生須崎裕さん(同▽立大の震災復興支援団体立ち上げメンバーである齋藤千尋さん(同)の8人が発表する。酒

張る若者の生の声を聴く、いい機会になると自負している。

基調講演は人口千人の村がらユズの加工品で年商30億円の売上を誇る高知県馬路村農協の東望史代表理事を、総括講演には人間回復の哲学者として著名な内山節立教大学大学院教授にそれぞれを迎える。さきまホーメーション(DP)では、これからの秋田を創る「さきま」に、若者から15秒動画メッセージを募り紹介する。

「秋田の未来を創るきっかけにしよう」。このフォーラムにそういう思いを込めて、準備を進めている。秋田市、フォーラム実行委員長、社会保険労務士、69歳)。

地域力フォーラムinあきたは、28日(日)午後1時から秋田市添川、秋田温泉さともみで開催。参加費は一般千円、学生500円。交流会は別途。事務局018・8335・5801。申し込みはhttp://kotoda.natsugijapan.com

秋田 さ き が け

2013年(平成25年)7月24日 水曜日

秋田 さ き が け

2013年(平成25年)7月18日 木曜日

地域力フォーラムinあきた

県内の若者8人
夢を抱負を語る

秋田市の未来について考える「地域力フォーラムinあきた」が28日、秋田市添川の秋田温泉さともみで開かれる。地者は▽医師の傍ら街おこし団体「Yokoteer」代表として活動する細谷拓真さん(横手市)▽あきた地球環境会議で環境問題に取り組む東海林拓郎さん(秋田市)▽北限の桃づくりに情熱を燃やす中村光心さん(鹿角市)▽秋田美人をテーマにモデルクラブ「スズラン」を立ち上げた原田裕成さんら。

午後1時～6時。参加料は一般千円、学生500円。申し込み、問い合わせは実行委員会018・8299・5801

情 報

1 地域力フォーラムinあきた 28日(日)午後1時、秋田市・秋田温泉さともみ。哲学者の内山節立教大学大学院教授の「新しい共同体の思想」と題した総括講演など。参加費千円(学生500円)。申し込み必要。実行委員会018・8299・5801



7月19日ABSラジオ番組「ごくじょうラジオ」で関実行委員長がフォーラムをPR。松井梨絵子アナ、マティログさんと。写真提供：ABS秋田放送

若者の視点から地域おこしを探る 秋田でフォーラム 秋田の未来をどう切り開く！をテーマに、

若い世代の視座で地域おこしを考えた「地域力フォーラム」が、秋田市であった。

28日に開かれたフォーラムでは、若者や学生、若手職人や農業者、観光関連企業への視座を



子育て中の母親を応援する取り組みについて発表する小五さん

若者が語る地域活性化

秋田での地域活性化の取組を語る若者たち。秋田市の未来を切り開くという選択肢を持てますか

秋田市の未来を切り開くという選択肢を持てますか

秋田市の未来を切り開くという選択肢を持てますか

秋田の未来、どう活性化

外からの視点生かせ/生き方のブランド化を



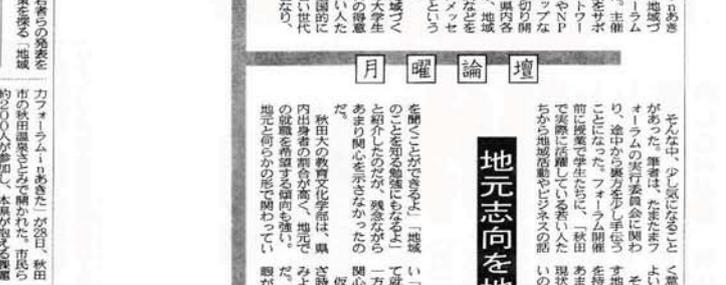
地域づくりに取り組む若者らの発表を開き、本県の地域活性化策を探ったフォーラム

秋田市の未来を切り開くという選択肢を持てますか

秋田市の未来を切り開くという選択肢を持てますか

秋田の未来、どう活性化

外からの視点生かせ/生き方のブランド化を



地域づくりに取り組む若者らの発表を開き、本県の地域活性化策を探ったフォーラム

秋田市の未来を切り開くという選択肢を持てますか

7. 開催要項

「地域力フォーラム inあきた」 開催要項 (抄)

～We create our future…
なまはげ・こまちを超えて～

1. 趣旨・目的

秋田県は今全国一のスピードで少子高齢化が進んでいます。西暦2040年の県人口は70万人を割るという推計も出されています。このままでは秋田は衰退の一途をたどるのではないかと多くの県民はそう危惧しています。こういう中であって、秋田をどう活性化すべきなのか。

幸い秋田には地域興しのために各地で前向きに活動を展開している若者が大勢います。

このフォーラムはヒューマンネットワークマガジン「かがり火」(発行人：菅原敏一氏、秋田市出身)の協力のもと、これからの秋田をどのようにして活性化して行くべきか、どう行動すべきかを、若者の視点で考えようと企画しました。

発表者は県内各地で地域興しに取り組んでいる若者や起業を考えている若者8名。基調講演には「ゆず」で成功を収めている高知県・馬路村農業協同組合東谷望史代表理事組合長、総括講演には「人間回復の哲学者」として著名な内山節立教大学大学院教授を迎えます。

これからも秋田は輝き続けたい。このフォーラムを秋田の未来を創るきっかけにしよう、そういう思いを込めて実行委員一同取り組んでいます。

2. 主催

「地域力フォーラムinあきた」実行委員会

3. 共催 (別記)

4. テーマ

We create our future

～なまはげ・こまちを超えて～

5. 開催日時

平成25年7月28日 (日)

受付 12:00 開会 13:00

6. 会場

あきた温泉「さとみ」

(秋田市添川境内川原142)

7. 定員 180名 (申込み順)

8. 参加費

- ・フォーラム参加費 一般 1,000円 学生 500円
- ・交流会参加費 一般 6,000円 学生 4,000円
- ・宿泊費 オール込み 朝食付 15,000円

9. お申し込み

- ・チラシ裏面の「参加申込書」によりFAXまたは郵送にてお申し込み下さい。
- ・メールでの申込み…メールアドレス (ffakita@gmail.com) に、①氏名、②住所、③電話番号、④一般・学生の別、⑤申し込み区分 (a)フォーラムのみ参加、交流会にも参加、(b)宿泊希望)の別を明記してお申し込み下さい。
- ・申込書に記載された個人情報はセミナーの運営管理以外には使用しません。

10. 申込み締切

- ・定員になり次第締め切ります。

11. プログラム (略)

12. 事務局

- ・NPO法人あきたパートナーシップ
(申込書郵送先：〒010-1403 秋田市上北手荒巻字 堺切24-2、申込みFax番号：018-829-5803)
- ・申し込みメールアドレス： ffakita@gmail.com
- ・電話でのお問合せ：018-835-0145 (担当：関)

※共催団体 (順不同)

- ・ヒューマンネットワークマガジン「かがり火」
- ・NPO法人あきたパートナーシップ
- ・秋田県立大学森林科学研究室
- ・NPO法人ふじさと元気塾
- ・SiNG
- ・NPO法人 Yokotter
- ・企画集団この指とまれ
- ・かもあおさ笑楽校
- ・秋田森の会風のハーモニー
- ・一般社団法人あきた地球環境会議
- ・子育てカフェにこりーフ
- ・男鹿のやきそばを広める会
- ・NPO法人秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会
- ・自然工房「北の風」
- ・ひだまりファーム
- ・まちおこしNPOオモシエナ

8. 時系列記録

	実施事項と内容
1/7	発起人会開催、㊤6人、於：とんちんかん ・開催日時(7/28)、会場(さとみ)内定 ・実行委員長に関さんを指名。
1/11	メーリングリスト開設No.1、対象6人
1/30	あきたパートナーシップさん協力を受託
2/20	実行委員20人に。
3/8	第1回実行委員会、㊤9人、於：とんちんかん ・実施要項、スケジュール案他
4/6	第2回実行委員会、於：甜甜 ・フォーラムの内容、発表者、準備の進め方等 ・実行委員副長に武内さんを互選。
4/14	実行委員27人に。
4/15	第1回執行部会、㊤8人、於：遊学舎 ・タイトル、サブタイトル、共催団体、発表者案、 広報、受付方法、予算他
4/19	メーリングリストNo.100に。
4/24	メールアドレス、QRコード開設
5/10	第2回執行部会、㊤9人、於：遊学舎 ・メインタイトル、サブタイトル、発表者の決定、 ・第3回実行委員会での討議事項の検討他
5/18	第3回実行委員会、於：遊学舎 ・開催要項案、予算案の討議、今後の取組み他 〃 実行委員31人に。
6/6	第3回執行部会、㊤6人、於：さとみ ・会場下見。横長で使用するごととする。 ・第4回実行委員会での討議事項の検討他
6/8	メーリングリストNo.200に。
6/14	チラシ(3000枚)、ポスター(150枚)完成
6/15	第4回実行委員会、於：遊学舎 ・予算不足時の対応、広報活動、申込受付、フォーラムでの諸対応他
6/18	チラシ電話番号訂正シール貼り
6/25	発表者への事前アンケート発送

6/27	メーリングリストNo.300に。
7/4	第4回執行部会、㊤8人、於：遊学舎 ・第5回実行委員会での討議事項の検討他
7/6	秋田魁新報「対話・会話」欄に「地域力フォーラムに寄せて」が掲載される。
7/7	実行委員38人に。
7/13	第5回実行委員会、於：遊学舎 ・参加者・収入を増やすための対策、フォーラムの対応、交流会の対応、会計他
7/16	スギッチ助成金不採択の連絡 〃 実行委員41人に。
7/18	秋田魁新報にフォーラムの紹介記事が掲載される。
7/19	ABSラジオ「極上ラジオ」で関委員長が松井アナ、マティログさんと対談でフォーラムを紹介。 会場(さとみ)下見。㊤5人 〃 メーリングリストNo.400に。
7/22	朝日新聞にフォーラムの紹介記事が掲載される。
7/23	第5回執行部会、㊤9人、於：遊学舎 ・会場の最終チェック 〃 秋田魁新報「催し」欄にフォーラムの紹介記事が掲載される。
7/26	週刊アキタにフォーラムの紹介記事が掲載される。
7/27	遊学舎からさとみへの運搬作業 〃 メーリングリストNo.492(前日まで)。
7/28	フォーラム当日。 9:30実行委員集合。打合後、会場・受付等設営 12:00受付開始 13:00フォーラム開始 18:30フォーラム終了 18:45交流会開始そのまま夜談義へ ※フォーラム参加者:189名、交流会参加者95名、宿泊者39名。
7/29	県外から参加の「かがり火」支局長を男鹿観光に案内。 〃 秋田魁新報、朝日新聞にフォーラムの記事掲載される。
7/30	滝本さんがメーリングリストにオンラインアルバム開設
8/2	河北新報にフォーラムの記事掲載される。

9. 実行委員名簿、協賛者一覧

実行委員名簿（「あいうえお」順・敬称略）

No.	氏名(敬称略)	住 所	備 考
1	鑑 啓記	秋 田 市	
2	安部めぐみ	秋 田 市	
3	五十嵐宏明	秋 田 市	
4	石黒 承子	秋 田 市	
5	石沢 真貴	秋 田 市	
6	伊藤 真由	秋 田 市	総合司会
7	大井 益二	由利本荘市	
8	大井セツ子	由利本荘市	
9	小野 修生	秋 田 市	
10	熊谷 嘉隆	秋 田 市	
11	小玉 由紀	男 鹿 市	発表者
12	齋藤 千尋	秋 田 市	発表者
13	斉藤 博	秋 田 市	
14	東海林拓郎	秋 田 市	発表者
15	菅原 歆一	東久留米市	代表・「かがり火」発行人
16	菅原 梯祐	秋 田 市	
17	菅原 展子	秋 田 市	事務局
18	菅原 実桜	秋 田 市	
19	須崎 裕	秋 田 市	発表者
20	関 徹彌	秋 田 市	実行委員長
21	多賀糸敏雄	横手市	
22	高杉 静子	秋 田 市	事務局
23	高橋 征夫	秋 田 市	
24	滝本 法明	秋 田 市	
25	武内 伸文	秋 田 市	実行副委員長・発表者
26	寺田 俊夫	秋 田 市	
27	土井 敏秀	男 鹿 市	
28	中村 光心	鹿 角 市	発表者
29	奈良 努	鹿 角 市	
30	檜岡 千晶	秋 田 市	
31	畠山 順子	秋 田 市	事務局
32	原田 裕成	秋 田 市	発表者
33	福岡真理子	秋 田 市	
34	藤谷 智義	秋 田 市	
35	藤原 和信	由利本荘市	
36	藤原由美子	由利本荘市	
37	細谷 拓真	横 手 市	発表者
38	蒔田 明史	秋 田 市	コーディネイター
39	松橋 珠里	秋 田 市	
40	山田 博康	北 秋 田 市	
41	渡邊 均	秋 田 市	

協賛広告社、協賛者（ご寄付者）一覧

I 協賛広告社（入金日順）

No.	事 業 所 名	市町村名
1	関社会保険労務士事務所 様	秋 田 市
2	菅原内科クリニック 様	〃
3	加賀谷こども医院 様	〃
4	岡田社会保険労務士事務所 様	〃
5	藤盛レディースクリニック 様	〃
6	山二システムサービス(株) 様	〃
7	社会福祉法人柏仁会 様	大 仙 市
8	(医)慈心会 寺田内科医院 様	秋 田 市
9	(医)三新会 三浦小児科内科医院 様	秋 田 市
10	(有)菅原餅店 様	大 館 市
11	ヨコウン株式会社 様	横 手 市
12	秋田県労働会館 様	秋 田 市
13	三又建設(株) 様	横 手 市
14	(株)みちのくテレコム 様	秋 田 市
15	東北労働金庫秋田県支部 様	〃
16	矢島保育園 様	由利本荘市
17	菅原梯祐 様	秋 田 市
18	秋田温泉さとみ 様	〃
19	(有)コマバ 様	〃
20	ナベシマ 様	〃
21	一般社団法人あきた地球環境会議 様	〃
22	(株)丸幸 様	横 手 市
23	秋田ホーチキ株式会社 様	秋 田 市
24	あきたパートナーシップ 様	〃
25	スギッチファン ド 様	〃
26	ウィンドベル 様	〃
27	しの八 様	〃
28	武内印刷(株) 様	〃
29	全労済秋田県本部 様	〃
30	(有)平鹿印刷 様	横 手 市
31	佐々木内科・循環器科医院 様	秋 田 市
	計31事業所	

II 協賛者（ご寄付者）（入金日順）

No.	ご 芳 名	市町村名
1	越後谷康作 様	秋 田 市
2	高橋 敏司 様	〃
3	関 展寿 様	大 館 市
4	中村 光仁 様	秋 田 市
5	関 晋弥 様	東 京 都
6	森 栄子 様	長 野 県
7	藤谷 智義 様	秋 田 市
8	関 徹彌 様	〃
9	細谷 拓真 様	横 手 市
10	(医)慈心会 寺田内科医院 様	秋 田 市
11	佐藤 忠次 様	〃
12	蒔田 明史 様	〃
13	佐藤 静生 様	〃
14	伊藤 真由 様	〃
	計14名	
	総計45件	

10 実行委員からの「一言」

滝本 法明 (秋田地域振興局)

地域の元気は、人が互いに交わる密度の高さにあると実感しました。フォーラムを通じて知り合った人たちと、みんなで一つのことを成し遂げたプロセスが私の宝物です。秋田では、更に次のステージに踏み出します。みなさん、共に前に進みましょう！



伊藤 真由

(総合司会、秋田デザインサポート事務局長)

若い方々が多くいらしたことが何よりも嬉しく頼もしく、良いカタチで会が続けていけたらと心から思っています。しょっぱなから噛んでしまい、笑いをとってしまいましたが、皆さんとご一緒させていただき感謝しております。



菅原 展子 (NPO:あきたパートナーシップ)

秋田県は高齢化先進県と言われますが、今回は高齢化社会におけるシニアの役割を強く感じました。関実行委員長をはじめとして、シニアの人脈、気配り、フットワークの良さを活かして大会準備をすすめていき、大会当日は若者のパワーをうまく引き出したように思います。シニアと若者のコラボで元気な秋田を作りましょう。



高杉 静子 (NPO:あきたパートナーシップ)

今回感動したのは、いわゆる人生の先輩たちの、若者をバックアップしようという気持ちが強く表れていたことです。交流会の席でも、たくさん先輩が若者たちにニコニコと歩み寄り、話を聞き、名刺交換をする姿が見られました。秋田



の先輩や『かがり火』の支局長の方々の温かい励ましを、秋田の若者はきっと感じてくれたのではないかと思います。

齋藤 千尋 (秋田県立大学学生)

今回、実行委員として、また発表者としてかわることができて本当に楽しかったです。こんなにも秋田を想い、行動できる仲間がたくさんいるということを改めて実感し、さらに秋田が大好きになりました。そう感じさせてくださった実行委員の皆様には、感謝しても感謝しきれません。本当にありがとうございました。



多賀糸敏雄 (食品問屋経営)

多くの仲間と共感！感激・感謝でした。雪国の樹木はたくましく、しなやかに、したたかに、雪が降り積もる中で平気で生きている！8人の若者たちは輝いておりました。これからも応援してまいります。



寺田 俊夫 (寺田内科医院)

仕掛け人の菅原さんと応援に駆けつけて下さった支局長の皆様感謝です。1回限りの祭りは誰がやっても成功します。継続することが難しいし重要です。若い人達の熱気をネットワークで拡げるために、「人を知り、人とのつながりを構築する」舞台になったと確信し、これからの秋田に期待します。



安倍めぐみ (秋田県立大学教育企画室)

フォーラムを終えて、立場や世代を超えて、一つのことを成し遂げた達成感をひしひしと感じております。各地域で活躍されている8名の方の熱いお話を聞き、秋田の未来を切り開く「底力」を



感じました。

高橋 征夫 (元近畿ツーリスト)

70年の長い人生でも記憶にないような、素晴らしい感動を味わいました。翌日の男鹿観光に帯同し、今回のフォーラムを最も客観的に観察なされたはずの『かがり火』支局長さんたちに訊ねたところ、その評価がすこぶる高かったことで、“大成功”を再確認しました。この貴重な実績を、着実に次回へとつなげていきましょう。



大井 益二 (矢島保育園理事長)

『かがり火』支局長に初めて接した秋田の人々からは「こんな人たちが現実にいるとは！目からウロコでした」との感想が多く聞かれました。私は『『かがり火』の支局長にはまだまだド迫力の人が多くいて、何かイベントを企画した場合のゲストに不自由することはないとのです」と答えました。



土井 敏秀 (民宿経営)

『秋田が糧』を暮らしている若い世代8人は具体的な活動を発表した後、内山節さんの講演にひと言も聞き漏らすまいと耳を傾けていました。8本の糸が内山さんの言葉を引き出した現場。すべてが大切な糸。君たちが好きだ。



奈良 努 (地方公務員)

「母さん知らぬ草の子を、なん千萬の草の子を土はひとりで育てます。草があをあを茂ったら、土はかくれてしまふのに。」と先人は詠った。ひたむきな土に、おおらかな風が吹けば、きっと素敵な秋田の風土が育まれます。謝謝。



須崎 裕 (国際教養大学学生)

このたびは、素晴らしい機会を与えて頂き、本当にありがとうございます。本フォーラムは県内の方だけでなく、「かがり火」を通して県外の方々も参加されているとても価値ある機会だったと、改めて感じました。交流会でも多様な意見を聞く事ができて本当に勉強になりました。「秋田で生きる」という決意を後押ししていただきとても幸せな時間でした。今後ともよろしくお願いたします。



蒔田 明史 (県立大学教授)

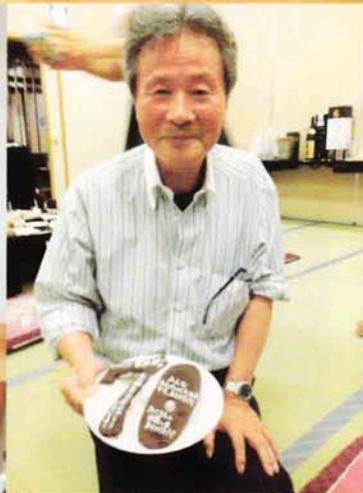
「納得できる生き方」を求めて頑張っている人はどこのまちにもいるだろう。そんな人たちが澁刺と暮らせる環境を作れる地域の未来は明るい！と確信できた時間。楽しい時間でした。



菅原 梯祐 (秋田スキー連盟)

サラリーマン年収が全国45番目、加えて若い人の職場が少ない秋田で子どもたちの将来を明るいものにするにはどうしたらいいのでしょうか？そんなことを考えながらのぞんだ今回のフォーラムは私にとって「終わり」ではなく「スタート」となりました。





交流会

万歳三唱で締めくくり

フォーラム終了後の交流会は、会場を三階和室の大広間に移し、県外からの参加者三十八名を含む九十五名が出席して開催された。

設けられた島(座)は十一。一つの島に八人から九人が配置されたが、会場が広く、お膳も大きく、端のほうは顔が識別できないほどだった。

挨拶・乾杯は実行委員の寺田俊夫前秋田県医師会会長。会場の「秋田温泉さとみ」の女将・手塚由美子さんの歓迎挨拶の際には多くのフラッシュがたかれ眩しいほどだった。

その後県外からの参加者有志から「連帯のメッセージ」があり、それやこれや呼応しているうちに会場は和気あいあい、次第に秋田の美酒に染まって盛り上がった。

中締め音頭は菅原欽一さん推薦の「中締めの女王」愛知県の高野なおみさん。参加者全員が手をつなぎ合って大きな「連帯の輪」を作り、万歳三唱で締めくくった。

二次会は隣接する和室に場を移しての「夜談義」。夜二時過ぎまでという人も何人がいたということだった。

翌日は県外からの参加者有志を数台の車に分けて男鹿半島観光に案内。秋田駅までお送りして無事終了となった。